

CLIPPEDIMAGE= JP352049848A

PAT-NO: JP352049848A

DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 52049848 A

TITLE: DEVICE FOR SWITCHING TRANSMISSION LINES OF OPTICAL FIBERS

PUBN-DATE: April 21, 1977

INVENTOR-INFORMATION:

NAME

TAKIMOTO, HIDEYUKI

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME

SUMITOMO ELECTRIC IND LTD

COUNTRY

N/A

APPL-NO: JP50125573

APPL-DATE: October 18, 1975

INT-CL (IPC): G02B005/14;H01P003/00 ;H04B009/00

ABSTRACT:

PURPOSE: To reduce the connection loss resulting from switching action, use any number of optical fibers and simplify the switching device by rotating two cylinder in a cylindrical pipe to switch transmission lines of optical fibers.

COPYRIGHT: (C)1977,JPO&Japio

2000年 2000年

特許 願
(特許法第38条ただし書の規定による特許出願)

昭和50年10月18日

特許庁長官 齊藤英雄殿

1. 発明の名称 ^{ヒカリ}光ファイバ ^{フックオン・カンパニオン}伝送線路間切換装置

2. 特許請求の範囲に記載された発明の数 3ヶ

3. 発明者

住所 ^{ヒロベントフカミヤマヤク}横浜市戸塚区田谷町1番地
^{ハイトエレクトロニクス}住友電気工業株式会社 ^{ヒロベントフカミヤマヤク}横浜製作所内

氏名 滝本英之

4. 特許出願人

住所 大阪市東区北浜5丁目15番地
名称(213) 住友電気工業株式会社
社長 亀井正夫

5. 代理人

住所 東京都杉並区清水3丁目21-15
氏名(6554) 弁護士 佐藤 薫

6. 添付書類の目録

(1) 明細書 1通 (2) 図面 1通
(3) 願書副本 1通 (4) 委任状 1通

50 125573

明 細 書

1. 発明の名称 光ファイバ伝送線路間切換装置

2. 特許請求の範囲

(1) 被切換光ファイバ伝送線路を同一の中心軸で回転する2つの円柱体にその互に接し合う円形断面内で同一半径上および同一放射角で配置し、その2つの円柱体を一つの円柱管内に挿入し、その円柱管内で、上記2つの円柱体を回転させることにより光ファイバ伝送線路の切換を行うことを特徴とする光ファイバ伝送線路間切換装置。

(2) 特許請求の範囲(1)の切換装置において、互に接し合う円形断面内の同一半径上および同一放射角に被切換光ファイバを配置するため、一つの円柱体に光ファイバを配置し、その円柱体を母線に垂直に切断して2つの円柱体を形成することを特徴とする光ファイバ伝送線路間切換装置。

(3) 特許請求の範囲(1)の切換装置において、被切換光ファイバ伝送線路のうち少なくとも1つ

①特開昭 52-49848

④公開日 昭52.(1977) 4 21

②特願昭 50-125573

②出願日 昭50.(1975) 10 18

審査請求 未請求 (全3頁)

庁内整理番号

7529 23
6442 53
6964 53

⑤日本分類

104 A0
60 C5
96WFC

⑤ Int. Cl²

G02B 5/14
H01P 3/00
H04B 9/00

識別
記号

の光ファイバ伝送線路の端末に、光源又は光検出器を取付け、前記回転操作により他の光ファイバ伝送線路の中間試験、最終試験、定期試験を行うことを特徴とする光ファイバ伝送線路間切換装置。

3. 発明の詳細な説明

将来の光ファイバ通信において、多心光ファイバケーブルを用いた光通信システムが考えられる。この場合、布設された後、各々の光ファイバ伝送線路間の切換を光領域で行う要求が出てくる。空間多重化された光ファイバ伝送線路間の光領域での切換方法として、①能動機能を有する多チャンネル光集積回路法、②機械的直換切換法が考えられる。

本発明は上記②の方法を実現するための光ファイバ伝送線路間切換装置に関するものである。

以下、実施例を図を用いて説明する。

第1図、第2図は本発明の主要部にあたる部分の構造説明図である。任意の径を有する円柱体の円周毎に母線に沿ってV状溝をその尖

字状に

端が円柱体(a)の一つの同心円柱(b)に一致するように作る。第1図は上記円柱体の円形断面図であり、第2図は上記円柱体の母線断面図である。本図において、V状溝は4つの場合を示している。

上記V状溝(c)に沿って、円柱体の長さより長い光ファイバ(c_1, c_2, c_3, c_4)を十分V状溝に押しつけ接着剤等(d)を用いて固定する。この場合、接着剤等(d)は円柱体(a)の側面より出ることとを避ける。上記のように、母線に沿ったV状溝内に光ファイバを固定した円柱体の長手方向の中心附近(e)を径方向に切断し、上記円柱体を長手方向に2分割する。

第3図において、上記光ファイバは $c_1, c'_1, c_2, c'_2, c_3, c'_3, c_4, c'_4$ となる。

尚、第1図において、4つのV状溝(c)の位置関係は、円柱体の中心に対して、90°毎になつてゐる。

長手方向に2分割された光ファイバ付円柱体(a_1, a_2)は、1つの円柱管(g)の内側に互に切断

面を突き合わせるようにして挿入される。

第4図は、上記円柱管(g)内に挿入された、2つの円柱体(a_1, a_2)の回転操作により、光ファイバ $c_1, c'_1, c_2, c'_2, c_3, c'_3, c_4, c'_4$ の切換を説明するための簡略図である。

切断時の状態を0度とし、円柱体 a_1 を固定し、円柱体 a_2 を時計方向に回転させるとき、90度回転で $c_1 \rightarrow c'_1, c_2 \rightarrow c'_2, c_3 \rightarrow c'_3, c_4 \rightarrow c'_4$ の切換が実行される(記号 \rightarrow は接続間光ファイバを示す)

同様にして、180度、270度回転で光ファイバ間の切換が実行される。360度で元の状態に戻る。

本発明においては、光ファイバ線路の本数に制限はなく、各V状溝に収められる光ファイバの外径差異を極力小さくすれば、切換による光損失は十分小さくできる外径差異を極小にするために、同一の光ファイバを用いることは一つの方法である。

本発明では、上記光ファイバ c, c'_1, \dots の

うち、例えば、 c_4, c'_4 の先端部に、光源あるいは光検出器を装備すれば、上記回転操作により、光ファイバ伝送線路の中間試験、最終試験、定期試験を行うことが可能となる。

また、円柱体aへの光ファイバcの配置方法の一例を第5図(h)(h')に示す。

本発明は以上の如く構成されているので、互に接し合うファイバの切換部分は同一物体のファイバを切断して形成されており、伝送線路の切換による接続損が小さい。また光ファイバの外径寸法と円柱体の半径を適当に選ぶことにより、任意の数の光ファイバを持つことが出来、被切換光ファイバ伝送線路の本数に特に制限を持たない。

回転によつて切換えるので装置が簡単である等の利点がある。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明の主要部にあたる部分の正面構造の説明図、第2図は同一部を切断した側面図、第3図は同切換装置の分解説明図、第4図

は同ファイバ切換を説明するための略図、第5図(h)(h')は円柱体への光ファイバの配置の一例を示す正面図を示す。

a, a_1, a_2 ...円柱体、 $c_1 \sim c_4$...光ファイバ、
d...V状溝、e...接着剤、g...円柱管。

代理人 佐 藤 重

